

だからあ　だからっ！

バサッ

いきなりあたしの目の前がうすピンクになったと思つたら、すんごい声が響いてきた。

「え、ええ、えええ、えり、えりかのおっ

ばかあああっつ!!!」

「え？　ちよ、ちよっつと、つぼみ!？」

ただだつ、と駆けてく音からすこし遅れて、あたしのとりの影が動いてく。とととっ、って音残して。やっば、いつきの方が音が軽いなあ、鍛えてるからかな？　なんて思いながら、あたしは頭から布をはずした。

うすいピンク地に流れる桜の刺繍は、まだかり縫いのゆかた生地。

袖で畳んでテーブル乗せて、カーテン開けてそと

見たら、つぼみの部屋のカーテンが、おもいっきし閉められちゃった。

「まーた、やっちゃったあ　」

カーテン閉まる瞬間、ほんのちよつとだけ見えたつぼみの顔にため息ついちゃったよ、あたし。あゝあ。

バタンッ！

「つぼ！　ああ」

花屋さん——つぼみの家の扉の前。あと一步のところ、ボクの手は届かなかった。

ずいぶん速かったなあ　脱げかけのショートパンツを履きながら走ってたのに、ボクが追いつけないなんて。

耳を澄ませば、階段を駆ける音。しばらくあとに、ドアが閉まる音。花屋さんの二階を見上げたら、思

3 だからあ だからっ!

わず、言葉が漏れてしまった。

「なんだっただろう？」

本当に、なんだっただろう。ほんの少し前までは、あんなに楽しかったのに

考えながら、ボクは隣のお店に向かった。ふわっとしたすがすが、足に触れてくすぐりたい。

「せつかく、私服でここまで来たんだけどな」

愚痴ぐちつてしまいそうな自分を、ボクは頭を振って飛ばした。あのつぼみが、理由もなしに怒るわけ、ないんだから。

えりかに呼び出されたのは、1時間ちょっと前のこと。ファッション部のミニ活動だから、ボクが作った服で来い、って言われたんだ。

えりかのお母様にご挨拶して、二階に上がってつきり、つぼみもいると思ってたけど、いたのは

えりかだけだった。

床の上で、薄いピンクの生地に埋もれるみたいに。ボクが挨拶したら、いらつしいの一言もなしにいきなり話しかけてきたっけ。

『こないだのさあ、なーんか物足りないんだよね。』

特につぼみの。たださくらの花びらあるだけじゃなくてさ、もちょっとこう、動きがあるほうがよくない?』

そう言って持ち上げたら、生地は無地の浴衣ゆかたになっていた。

それで納得したんだ。ああ、つぼみ専用の浴衣を作りたいんだ、だからボクを呼んだんだな、って思って。『いいけど、でも、女の子の着物はおはじょりがあるから、途中で流れが切れちゃうんじゃないかな』

『あ、そっか。さっすがいつき。やっぱ、いつも着物見てる人は違うね、へへ』

ボクに笑いかけるにっこりした顔を見ると、素直だなって思う。これは、えりかのいいところだよな。

『そんじやさ、帯の上と下とで、ふたつの流れにし
たら?』

『ああ、それならいいかも』

えりかが話しながら別の布を切つて、無地の生地
に縫い付けて。ボクがそれを見ながら少しアドバイ
スして。仮縫いだけど出来上がった浴衣を抱きかか
えながら、つぼみに電話するえりかを見て、ボクは
本当に仲間になつたのを、実感してたんだ。

だけど

「仮縫いが出来たばかりの浴衣に、着替えさせよう
とした。それだけなんだよね」

それはまあ、いきなり脱がしはじめたのにはびつ
くりしたけど。でも以前にここでいろんな服を試
してもらつたつて、えりかは言っていたし。だいた
い、合宿ではつぼみもボクを脱がしてたんだし。い
つものことだと思つてたんだよ。それが

「『えりかのばか』か。どうしちやつたんだろう、つ

ぼみ ?」

言いながらふと顔を上げたら、いつの間にかボク
は、えりかの部屋の扉を開けていた。

無意識で扉を開けてしまったのに気づいて、ボク
は思わず目をつむつた。耳まで押さえたほうがいい
かと思つただけけど、

「わっかんない」

あれ?

開けた目の前には、えりかのむすつとした顔。そ
れだけだった。

「えりか、怒らないんだね」

「いつきは、あたしがいきなり、キーツー! つてな
ると思つたの?」

むつとした顔のまま、目線だけボクのほつを見て
る。そうか、

「ごめん。でも、そんな感じかなくなって思ってたよ」
ボクはまだまだえりかのこと、よく知らないんだ。
そう思いながら、さっきまで座っていたクッションに腰を下ろしたら、えりかは腕を組んで、宙を見上げていた。

「そだね。ほかの子だったらそうなっちゃうかも」
「つぼみだと、違うの?」

「うん つぼみってさ、めんどくさい子なんだよ」
め、面倒くさいって

ボクが口をひらけないでいると、えりかの体が後ろに倒れた。そのままベッドの端で頭を支えて、天井向いて、

「ホントだよ? な〜んにも言わないくせにさ、ひとりで悩んで落ち込んで怒って、それみ〜んな、あたしにわかってほしいって思ってるの。」

あーっ、めんどくさいっ!」

「そう かなあ?」
ボクも腕を組んで、床を見つめた。疑うわけじゃ

ないけれど、ボクの見てきたつぼみとは、ちょっと違う気がするから

「つぼみはさ、頭よすぎなんだよ。 すんごくいろんなこと見ててさ。こうなんじゃないか、ああなんじゃないか、ってみんな想像で決めちゃってさ。でも、それがほとんど合ってるんだモン。もう、探偵にでもなれっつての!」

ああ、耳が痛い ボクも、たまに自分だけで決めてしまうから。

でも、そうか。面倒くさいって、そういう意味なんだ。ボクたちがわかる前に気がついて、反応してしまう 感受性が強すぎる子、なんだよね。

「だから、あたしは決めてんの。なんで怒ってんのかわかんない間は、できただけ怒んないようにしよう、って。その代わり、ヘンなこと怒ってたりしたら」

「殴っつても目を覚まさせる?」
ボクが一言口にしたら、えりかががばっと起き上

がった。びっくりした顔でボクを見てるね。

「ええっと　んもあー！　いつきも頭よすぎっつ！！」

ボクが苦笑いしたら、つられてえりかも笑ってくれた。そうだね。大変だけど、ボクたちは『面倒くさい子』の友達なんだから

「それじゃ、なんで怒ってるのか考えようか。殴らなくてもいいように、ね」

って、いつきは言ってくれたけど。ふたりで30分話しても、答えは出てきてないんだよね。

「そりゃ、ちよっと誘うのゴーンだったかもしんないけどさ、部屋に入るまではふつうだったし」

「うん。ボクにも、いつもと違うようには見えなかったよ」

最初っから繰り返しもう5回目。でも

「ゆかた見せたら目えキラキラさせてたし」

「自分で体に合わせたりもしていたね」

「なのに、ホントに着せたら」

あゝっ、もう！　なんと思いついても、ぜんぜんわかんないっ！！

「可愛^{かわい}かったのにな、つぼみの下着」

いつきも、ときどきみよーなど「見てんのよね。こんどは下着か

「ん？　下着？」

「？　ああ、えりかは脱がせてたから見なかったんだ。

明るいピンク地に花のワンポイントでね、腰の両側で結ぶタイプで。すっごく可愛くてさ、見てたら思わず顔がにこにこしちゃって

にこにこ？

あたしの頭に、なんかひっかかった。

にこにこ。つぼみの、腰で結ぶ下着見て、いつきがにこにこ　あっ！

「えりか？　どつしたの、目を見開いたりして」

7 だからあ だからっ!

いつきの声が聞こえたたん、あたしの頭の中で、
なんかつながった!

「そ それであっつ!!」

カーテン閉め切った自分の部屋のベッドの上で、わ
たしはまくらに頭を突っ込んでました。

もう なんてこうなっちゃったんでしょう?

カサッ

足を動かしたら、袋にぶつかりました。

顔を上げなくてわかります。これは、さっき
買い物してきた袋ですから。

下着やさんで、つい買ったんですよね

(なに買うんでも、ちよこっといつもと違うの選ん
でみなよ。きつと変わってくから!)

ああ、またえりかの声が聞こえてくるみたいです。

それでつい、ついつい

わかってるんです。わたしがいけないんです。帰っ
てすぐに着けてみて、鏡に映して眺めてみて、ちよっ
と気分がよくなっちゃったからって えりかに呼
ばれて、そのまま行っちゃうなんて。悪いのはわた
しです。でも

「でもでも、いつきに笑われるなんてっ!」

足をばたばたさせるたびに、下着の袋がカサカサ
いって。なんだかもう、自分でもどうしたらいい
のか

「こらっ、つばみっ!」

あれ? えりかの声?

まくらから頭を出して、閉めたカーテン越しに窓
の方を見た瞬間、もっと大きな声が響きました。

「こおんの、ひもパン女あっ!」

え、え? えええっ!?

「こおんの、ひもパン女あ〜っ!」

いきなり窓を開けて叫びだしたえりかの後ろで、ボクはしばらくあっけにとられていた。

「へ? ちょ、え、えりか??」

なんとか開いた口も、振り返ったえりかのひと睨みでまた閉じてしまう。なにが起こったんだろうと思つてると、えりかが両腕を開いて、思いつき息を吸つて

「ひもパンひもパンひもパンひもパンひもパンひもパンひもパンひもパンひもパンひもパンん〜っ!!」

「やめなさあぁいっつ!!」

正面の窓が音をたてて開いて、出てきたのは真っ赤になつたつばみ。

「な、なに叫んでるんですか! そんな、そんな恥ずかしいことっ!!」

「ひもパンはくのの、なにが恥ずかしいってのよ! そんなもん、この歳の女の子100人集めたら80人は持つてるわ!」

「だいたいねえ、いつきだつて『かわい〜い』とか『はいてみたい〜い』とか言つて、にこにこしてんのよ!」

い、いや、ボクは とか とかつけてな

「とにかく! あんたがそれはいて、恥ずかしがる理由なんてひとつもないのっ!!」

「だ、だからつて、やつぱりっ ええっ!?!」

えりかの手が、部屋の隅でなにか掴んだと思つたら、窓に向かって走り出した。

危ないつて思つた瞬間、その手から銀色のものがつばみの部屋のベランダに伸びて は、はじこ!?

「とりやあつ!」

えりかはそのまま、はじこの上を走つていった。ボクだつてためらうくらいの細いはじこを、3歩で渡り切つて その勢いで、つばみにとびかかった!

ふたりがひとつになって、つぼみの部屋に倒れてゆくのを、ボクはえりかの部屋の窓から、じっと見つめていた。

『わかんなくて、ごめん、つぼみっ!』

『もう、えりかはずるいですよ。これじゃ、許すしかないじゃないですかあ』

隣の家の窓の中、小さい声が、ボクにも聞こえた。聞こえるはずなのに、聞こえた。

ふう

えりかに抱きつかれてそのまま倒れてしまって、打った頭もおしりも痛いのに、なぜだか気持ちよくなっています。

もうちょっと、このままでいいかな

「つぼみ、ごめんね。えりかの言った通り、ボクは別に可笑しくて笑ったんじゃないんだ」

そんなことを考えてたとき、離れたところから聞こえた声に、わたしは顔を上げました。

「え? あ」

窓の向こう、えりかの部屋の窓に、いつきの顔そうでした。目の前のえりかに気を取られて、いつきを忘れちゃってました。

「でも、ひとつわからないことがあるんだけど」

「あれ? なにがわかんないの?」

えりかがわたしを起こしながら、首をかしげて言っています。頭の上に、ハテナマークが見えるみたいに。「いや、だから 人前で脱ぐのが嫌なのはわかるけど、以前にもえりかの部屋で着替えはしたんだよね。なんで恥ずかしいのかな、って思っつて」

「だって、その は、恥ずかしいじゃないですか。いつもと違う下着って」

うっ! なに言わせるんでしょ。いつき、意地

悪です。

でも、いつきは目だけ上を見て、何か考えてます。なんなんでしょう？

「あ、そうか。ごめんごめん、ボクは見慣れるからなんだね」

「へ？」

えりかと、声が重なりました。見慣れてるって

何がですか？

「ほら、ひもで結ぶ下着ならいくつか持ってたから。まあ脇で結ぶのはないけど、前で結んで、布をその前に垂らすのなら」

「前で結んで？」

「布を垂らす？」

えりかと目を合わせても、ハテナマークばかりです。

ええと、下着ですよ。っていうことは、ひもの

前に布 ええっ!?

「あー、つかぬことを伺いますが、いつきさま」

「なに？ あらたまって」

えりかがゆっくり窓の方を振り返ってます。わたしは、聞かないほうがいいんじゃないかと思うのです。思うのですけどあつ

「それは、ふんどじというもの では？」

「そうそう、懐かしいなあ。小学校まではずっと使ってたんだよ、家では でも、そんなに可愛くなくなっただけだね」

ああ、聞いちゃいました。そ、そうですね。いつきは、格闘家さんで、だから

となりに目を移したら、えりかの顔がひきつってます。そうです。そう、そう、あ、は、ははははは

「いつしよにしないでくださいっ!!」

— おしまい —